

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：23903

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18584

研究課題名（和文）国際比較による「過剰消費される祖父母」を超えた世代間関係の可能性に関する実証研究

研究課題名（英文）Exploring the way to avoid over-consumed grandparenthood in Japan based on cross-national qualitative surveys

研究代表者

安藤 究（ANDO, Kiwamu）

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：80269133

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、祖父母を子育て支援エージェントとして活用しようとする施策が、結果的に「祖父母の短期過剰消費」を生み出すリスクを生む可能性もあることに鑑み、成長した孫と祖父母の関係を有意義なものとする条件を探索的に検討した。その結果、祖父母が子育て支援のエージェントとなる場合でも、祖父母が生活全般を小さな孫の育児支援のみに投入してしまわないような関係性が社会的・文化的な正当性を有することが、十分条件ではないにしろ、孫の小さな時期に集中して「過剰消費される祖父母」を防ぐ必要条件となるという知見が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の人口学的条件のもとでは、祖父母・孫関係が30年以上に渡ることも珍しくはない。しかし成長した孫と祖父母の関係を有意義なものとする要素については、大規模データでgrandparenthood研究が行われている欧州や北米でも確立した見解は得られておらず、この点で本研究には一定の学術的貢献がある。また、仕事やボランティアを辞めて孫の世話のエージェントとなることは、孫が成長したときに、新聞でも報道された「孫離れうつ」のような、世話役割喪失がもたらすリスクがある。孫の世話をしながらも、孫が成長したときにも有意義な関係を可能とする要素を探る本研究課題は、この点において社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This project aimed at exploring the way to avoid “over-consumed grandparenthood” drawing on data from cross-national qualitative surveys. Some of childcare support policies in Japan assume grandparents as childcare support agents, which might lead to “over-consumed grandparenthood” on the early stages of grandparent trajectory. Cross-national qualitative surveys conducted in this study indicate that giving social and cultural legitimacy to such grandparenting as doesn't mobilize all social resources of grandparents to support parents in childrearing could be a necessary condition to prevent the “over-consumed grandparenthood.”

研究分野：社会学

キーワード：祖父母性(grandparenthood) 祖父母の過剰消費 祖父母と孫の関係 祖父母性と福祉国家・社会保障政策 国際比較

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の世代間関係に関する施策の動向としては、2015年の「少子化社会対策大綱」における3世代同居・近居の促進施策を典型とするような、祖父母を子育て支援における資源として位置づける施策が中心であった。日本における祖父母・孫関係に関する研究も、施策の動向にも対応するような、子育て支援の担い手としての祖父母に焦点を当てた研究や、子どもの発達に及ぼす祖父母の影響についての研究が多かった。他方で海外では、祖父母の役割・行動や祖父母であることの意味が、福祉レジームの類型によって異なっていることが、大規模な国際比較研究から示されつつあった。特に、「家族の復権」の動きの下で祖父母役割に特化した国際比較調査がおこなわれた欧州のデータからは、家族主義的な南欧よりも保育園の整備が進んだ北欧の方が、子どものケアにおける祖父母の役割の評価が高いという予想外の結果が示された。さらに、社会民主主義的福祉国家(北欧)の祖父母は社会保障制度の補完としての family saver、保守主義的福祉国家(大陸ヨーロッパ)の祖父母は孫の母親のフルタイム雇用を可能とする mother saver、自由主義的福祉国家(米国など)の祖父母は、薬物・アルコール依存や離婚などで子育てが出来ない親の代わりに孫を育てる child saver という類型が抽出されていた。

2. 研究の目的

福祉レジームの類型による祖父母の類型を示した研究は、祖父母性 (grandparenthood) の研究に国際比較が不可欠であることを示したものの、福祉レジームの類型との関連が示されているのは、「小さな孫と祖父母」の関係に限られていた。経済が高度に進展して少子高齢化が進んだ社会では共通して祖父母期の伸長が見られる中で、長期にわたる祖父母期における祖父母性が福祉レジームとどのように関係しているかを示した研究はなく、高齢者としての祖父母、主体としての祖父母の well-being とも深く関わる「成長した孫と祖父母」の関係についての体系的な研究は、海外でも国内でも未着手な状況であった。そこで本研究課題では、祖父母が子育て支援の担い手になりつつも、「過剰消費される祖父母」問題を回避し、平均余命の大幅な伸長のもとで歴史上初めて可能となった長期間の祖父母 - 孫関係を形式的な関係ではなく、祖父母と孫の双方にとって有意義なものとなる条件を実証的に探ることを目的とし、「孫離れうつ」などの社会的問題の解決に必要な施策の手がかりとする。

3. 研究の方法

国際比較のための海外調査は、まずオランダで聞き取り調査をおこなった。オランダは長い間欧州の中では伝統的な性別役割分業が強かったが、周知の通り失業率対策の労働政策が結果的にそうしたジェンダー構造の変革につながった。ただし北欧やアメリカのように夫婦が Dual-earner として働くというのではなく、パートタイム労働と柔軟な労働時間の調整を特徴としていることから、そうした社会保証政策の特徴が子育て支援エージェントとしての祖父母の位置づけやそのスタイルに反映されているか否かを探るために本聞き取り調査は企画された。すなわち、ワークシェアリングによる女性の就業率の上昇(=専業主婦の減少)が世代間関係にどのような影響を及ぼしているか、特に祖父母が子育てエージェントとしてどの程度利用されているかに焦点をあてて、親世代9人に聞き取り調査をおこなった。世代間関係に及ぼすオランダの制度的影響を検討する為の調査であるので、オランダ以外の出身でオランダ人と結婚したインフォーマント、もしくはオランダ以外の出身でオランダで子育てをしているインフォーマントを選び、本人もしくは配偶者の母国とオランダでの子育ての相違が浮かび上がるように調査を設計した。特にオランダ人と非オランダ人の夫婦に関しては、可能な限り夫婦単位でインタビューを試みた。オランダ人以外のインフォーマントの母国は、スロヴェニア、ハンガリー、トリニダードトバゴ、スペイン、日本、ペルーである。

高度な福祉国家としては、ノルウェーの「成長した孫と祖父母」の関係について聞き取り調査を計画した。ノルウェーを対象としたのは、ヨーロッパ全体の祖父母・孫関係の国際比較データの分析結果で、祖父母の役割・規範的態度に関するノルウェーの祖父・祖母の回答の分布が、別のプロジェクトでおこなった東京・名古屋の調査結果と最も近かったことによる。祖父母側の役割意識・規範的態度に大きな相違がない場合に、社会保障制度の相違が祖父母・孫関係に長期的に影響を及ぼすか否かについての示唆を得る目的で聞き取り調査が計画された。実査は、在日本ノルウェー大使館の助力も得て、ノルウェーの成人学校(フォルケホイスコーレ)の学生を対象として可能となった。その後祖父母側の調査として、調査対象となった成人学校の学生の祖父母でインタビューの了解が得られたケースに聞き取り調査を行う予定であったが、コロナ禍のもとでそれは断念せざるを得なかった。2022年にノルウェーへの入国制限が緩和された後でも、調査対象者が成人の孫の祖父母で高齢であることから、日本の感染状況によってノルウェーの祖父母側の調査は出来なかった。

日本国内における「成長した孫と祖父母」との関係については、地域的な相違の可能性も考慮しつつ聞き取り調査をデザインした。人口学的変動で長期化した祖父母・孫関係に対応するように、調査対象者の年齢は18歳~40代前半とした。コロナ禍で対面での聞き取り調査は事前に

計画したようには進まなかったが、コロナ禍による研究期間の延長によって、高校生活をコロナ禍のもとで経験した若年層の回顧的調査が可能となった。

4. 研究成果

4-1. 海外調査

オランダにおける育児支援のエージェントとしての祖父母の活動は、先行研究で北欧のパターンとして報告されているような、1 - 2週に1回という回答が多かった。スロヴェニア人女性と結婚したオランダ人男性は、その理由として、「祖父母は働いて忙しいし、彼ら自身のキャリアがある。また彼ら自身の濃密な家族の時間を持っている」ので、祖父母に子どもの面倒を見るよう依頼する頻度はそれ程多くないとのことであった。また、「子育て支援には専門的なサービスがある」とも回答した。それとともに、祖父母に期待するのは、具体的な日々の子育ての補助というよりは、「子育て経験者として、こういうときにどのように解決したか」についてアドバイスして欲しいということが挙げられた。「世代の相違とか時代の違いというのはあるけれど、にもかかわらず、「祖父母は親にとって、共通の規範や価値観を持つ、頼りになる『仲間』(peer)である」というのがその理由であった。

アメリカ人女性と結婚したオランダ人男性は、祖父母が孫にとって「積極的な役割」を持つとコメントした。ただしこのコメントも、孫が小さな時に、祖父母が日々の子育て支援のエージェントとなるということで「積極的な役割」としたのではなく、祖父母が孫の role model になり得るという点にあった。このインフォーマントの息子は高校生の時にストレスで学校を退学したが、親は忙しく息子は特に何することもなく部屋に引きこもっていたので、インフォーマントは、田舎のインフォーマントの親元に息子を送った。祖父母はインフォーマントの息子に家のペンキ塗りや庭の手入れの仕事を与え、それ程多くないものの報酬も与えた。人のいないところで車の練習もさせて、こうしたことでその息子は前向きになったということである。祖父母は孫の学校での問題は細かく知らず、孫と一緒に楽しみながら、人生に対する積極的な態度を孫に示すことができたということだった。

オランダ人男性と結婚した日本人女性は、周りの家族より、少し多く祖父母に子どもの面倒をみてもらっているとコメントした。子どもを育児施設に預けると経済的補助が支給されるものの、育児施設に預けるのは週1日としているとのことであった。夫は週5日働き、妻は週3日働いているが、インフォーマントは仕事をもっと増やすこともできるものの、週2日は子どもの世話にあてているとのことであった。すなわち、月曜日は育児施設、火曜日と水曜日は母親(インフォーマント)、木曜日と金曜日は祖父母(夫の親)、土曜日と日曜日は夫、という役割分担である。祖父母はアドバイスなどの補助的な役割ではなく、毎週2日は祖父母が担当していて、叱ったりもするとのことだった。

ただし、「お祖父ちゃん・お祖母ちゃんは他に手がない場合で、必ず頼まなければならないとは思っていない、私たちの子どもだから」ともコメントされた。この事例では、祖父母は約120km離れたところから水曜日の夜にきて、木曜日・金曜日をフルに孫の世話をしている。このように積極的に祖父母に関わってもらっているのは、孫が祖父母を尊敬して家族のつながりを強くするためとのことであったが、インフォーマントの周りではあまりそうしたスタイルは一般的ではなく、周囲ではやはり週に1日、一回につき数時間の手伝いが多いともコメントされた。

オランダに関して人口に膾炙した「1.5モデル」は、夫の労働による所得が1.0、妻の労働による所得が0.5ということで、専業主婦が多かった時期に比べると労働や家事・育児に関するジェンダー構造は大きく変化したものの、ワークシェアリングシステムによって保守的なジェンダー関係が完全に消滅しているわけではない。しかしワークシェアリングによるジェンダー構造の変化は、部分的かつ結果的には、子育て支援エージェントとしての祖父母の活用を一定程度に押さえて、オランダにおける祖父母の「過剰消費」を防止することにはなっていると考えられる。

それ以上に注意したいのは、「祖父母には祖父母の生活がある」というコメントが多くのインフォーマントによって繰り返し語られていたことである。上述の例外的に祖父母の関わりが多かった事例でも(祖父母が週2日フルに孫の養育の担当)「孫が小学校に行くようになったら、もう世話をしには来ない」と祖父母からは言われているともコメントされた。これは、祖父母には祖父母の社交生活があり、週2日を孫の世話にあてるのは限られた期間だけということである。すなわち、孫の養育エージェントとしての祖父母の活動は、祖父母自身の仕事や社交生活を犠牲にしない限りにおいて行われていると言えよう。

ノルウェーの成人学校の回答者の年齢は19歳~21歳で、成人学校に入学する前は親と同居というケースが大半であった。成人学校入学前の1年間の祖父母とのコンタクトについては、対面でのコンタクトは、父方祖父母・母方祖父母ともに全体的には少なく、祖父よりも祖母の方が父方・母方ともにやや頻度が多かった。コロナ禍前であったが、リモートでの祖父・祖母とのコンタクトに関しては、母方祖父母の方が父方祖父母よりやや多く、祖父よりも祖母とのコンタクトが多かった。手段としては電話と携帯のショートメッセージが多かった。

人生の価値観が似ている祖父母がいるか否かという問いに関しては、8割が「いる」という回答で、父方の祖父母よりも母方の祖父母の方が多かった(特に母方の祖母)。コミュニケーションのスタイルとして、「友達のように対等な感じ」を経験したことがあるかどうかについては、7割強が「ある」と回答した。その経験の多くは、「共通の体験や趣味」「祖父母が孫を一人の大

人として扱う」ということに由来していた。

「共通の体験や趣味」では、しばしば祖父母も含めて家族と一緒に自然の中を歩くことや、祖母と回答者が読書好きであることなどが挙げられていた。祖父が船員で数回日本にいったことがあるという回答者は、その回答者も日本に行くということで、祖父が孫の経験に関心を持っているとコメントしていた。もう一つのパターンは、一方で孫も成長するにつれて祖父母について理解するようになって重要な事柄について話をするができるようになり、他方で祖父母が孫を子どもではなく一人の大人としてみるようになったというものである。

逆に「対等な感じのコミュニケーションの経験はなかった」と回答した人に、どのような要因でそうした対等なコミュニケーションが培われると思うかと尋ねたところ、居住地という条件とともに、「共通の関心や知識を持っていること」「共通の関心と経験」が挙げられた。

祖父母が「孫を一人の人間として」位置づけてコミュニケーションすることの重要性は、先に述べたオランダの調査でもコメントされていた。カリブ海地域出身のインフォーマントによれば、オランダ人の夫は、祖父が亡くなるまで祖父をしばしば訪ねていて、また夫だけでなく夫の上の兄たちも祖父をよく訪問していた。そうした緊密な関係が形成されたのはどのような理由によると思うかを尋ねたところ、「夫と一緒に夫の祖父に会いに行ったこともあるが、夫の祖父が夫を一人の人間として接していたことが印象に残っている」との回答だった。それゆえ、自分の子どもにも、自分たち親を介さずに、直接祖父母とコミュニケーションするようにしていると語られた。

4-2. 国内調査

日本国内の「成長した孫と祖父母」の関係の聞き取り調査でも、有意な関係を成立させる要素としては、ノルウェーの成人学校の学生の調査と共通する結果は得られた。20世紀の後半にインフォーマルに存続した家制度の影響が相対的に小さいとされる札幌の調査では、「好きなこと」「考え方・性格」の共通性が、地理的近接性という条件がない場合にも有意な関係を成立させていた。札幌で生まれ育った女性のインフォーマントは、母親が熊本出身で、その母方の祖父との関係に非常にコミットしていた。「子どもの頃から自分は本が好きで、祖父も好きで、何ヶ月かに一度、おもちゃと一緒に本も送ってくれた」ということで、共通の読書好きということで心理的に強く結びついていたとコメントされた。その母方の祖父は亡くなるまで「孫に残す」ということでノートに詩などを書き写して、そのノートがインフォーマントの手に渡ったときには、「好きな詩が共通しているし、泣けるほど嬉しかった」ことをはっきりと覚えているということだった。性格的にも、「気に入ったら、飽きるまでそれを行う」ということが共通していて、「血のつながりがあっても、なんかこう、一人の人間同士なので、家族とかの前に、気が合うとか合わないとか、祖父とは子どもながらに気があった」ともコメントされていた。

子どもの時に祖父母と同居していたものの母親の再婚で別居となった男性は、大学を卒業してから祖父母との親密性が増大したとコメントした。「社会人になって、一人暮らし始めて、車をもつようになって、(親元に帰るより)実はじいちゃん・ばあちゃんに会いに行く頻度の方が多いんですよ」というように、対面でのコンタクトが仕事を始めてから増えている。10代後半の時には、「気持ちの部分ではかわっていなかったけど、高校・大学のときは会う頻度はかなり少なかったと思います。自分も大学の友達とか部活とかで遊んだり過ごして」という状態だったが、調査時点では、祖父母の家に行ったら、「どこどこに行ったよとか、この前こんな時間まで仕事したとか、内容は友達とかと話すのとほとんど一緒だと思います。友達というほどではないけど、多分、親よりもいろんなことを話していると思います。昨日、こんな子とデートしたとか、最悪だったとか。あんたにはいい人いるからまだ大丈夫とか言われたり」というように、比較的友人と近いような関係性が成立していた。

このような関係性の変化は、「じいちゃんの具合がわるくなって、病院の手続きとか、区役所の手続きとか、ばあちゃんわかんないということがあって、母親と協力して、いろいろ面倒みるというか、自分が相談員さんとしゃべったりして」ということで、孫が祖父母のサポートをする役割を引き受けることで生じた。ただし、祖父・祖母と同じような程度で親密というわけではなく、「社会人になって話をするようになったのは、ばあちゃんの方で」ということだった。「祖母の方は、(インフォーマントに関して)小さな孫というより大人になったという感覚があるだろう」と認識しており、こうした「子どもの孫と祖父母」の関係から「大人の孫と祖父母」の関係への転換については、「じいちゃんとはそういう関係の変化はなかった」とコメントされている。

「大人としての孫」という認識が生じるか否かは、「子どもとしての孫」と祖父母との関係性が、上下関係というよりも友達のような水平的な性格があるかどうかで左右される可能性も示唆された。「私は大きくなってから祖父母とそんなに連絡とった記憶もなくて、亡くなってしまってからもうちょっと連絡取って会いに行けば良かったなと思っているぐらいなんです」というように、成長してから祖父母との実質的な関係はなかったという40代前半の女性のインフォーマントは、自身の祖父母との関係と、自分の子どもと自分の親の祖父母・孫関係を比較して、次のようにコメントしている。自身と祖父母との関係は、「なんとなくですけど、なんか躰けるといふか、そんな雰囲気だったなって。上下の関係が多少はあったという感じ」であったのに対し、「今、自分の子ども達と父・母との関係をみていると、どっちかっていうと、躰というよりは、同じような目線で、できたことに一緒に喜んでくれたりとか、そういう声かけとか見守り方をしてくれているので、大きくなって心との距離感が近いというか、そのまま続いてくれた

らいいなと思っていますけど」ということである。

5. 考察と今後の課題

海外調査と国内調査の結果を比較してみると、成長した孫と祖父母の間に有意な関係が成立する場合に、幾つか共通して見られる背景がある。第1には、祖父母と孫が積極的に話しができるような、共通の関心があることである。これはノルウェーの学生と日本の成長した孫の聞き取り調査の双方で浮かび上がったことであり、典型的には共通の趣味や共通の経験などである。ここで考えておく必要があるのは、孫が成長したときに話しができるような経験や趣味が祖父母側の生活にあるかどうかということであろう。オランダでの聞き取り調査で何度となくコメントされた、「祖父母には祖父母の生活があり、つきあいもあるから」というようなライフスタイルは、孫が成長した時点で成立しているだけではなく、社交生活や余暇生活が継続的・累積的に展開されている必要がある。例外的に週2日フルに祖父母に孫の世話をしてもらっていたオランダのケースでも、そうした孫の世話のスタイルは孫が小学校に行くまでと祖父母側から言われていた。

第2には、孫が成長したときに祖父母が孫に対して1人の「大人」として接する態度によって、成長した孫と祖父母の間に有意なコミュニケーションが成立する可能性が見られた。ノルウェーの成人学校の学生は、祖父母が自身を1人の大人として接してくれることで重要な問題について相談したり意見を交換することができるとコメントしていた。オランダでも、頻繁に祖父のもとを訪問していたオランダ人男性と結婚したカリブ海地域出身の妻は、その祖父が夫に1人の人間として接していたことを強調していた。日本の聞き取り調査でも、就職してから祖父の健康問題に際して孫が事務的な手続き等をサポートするようになったときに、祖母がその孫を「子どもではなく大人」として接するようになっていたとコメントされた。このような、祖父母が孫に対して「1人の人間として」「1人の大人として」というような態度で接することが可能となるのは、一つには、日本の調査でコメントされていたように、孫が小さな時から祖父母と孫の関係が水平的な性格を帯びている場合であることは考えられよう。それとともに、上の第1の背景として検討したように、「祖父母には祖父母の生活がある」というような認識が社会の中で共有されていること、すなわち中年期から高齢期において祖父母の地位を占める人が、祖父母役割だけに埋没しないことを当然と考えるような価値意識が社会にある場合も考えられるであろう。そうした価値意識のもとで、祖父母の地位を占める人は、その人のパーソナル・ネットワークを構成する1人のメンバーとして孫を位置づけることが可能となるからである。

このような「祖父母には祖父母の生活がある」というような社会的認識は、孫が小さな時に、祖父母がその社会的な活動を止めて孫のサポートにその資源やエネルギーの多くを動員するような、祖父母の「短期過剰消費」を防ぐことにも繋がるであろう。ただし、オランダ社会の中でそうした了解がどのようにして成立するようになったかについては、今回の国際比較調査からは明らかに出来なかった。オランダはヨーロッパの中では伝統的なジェンダー意識が強かった社会であり、ワークシェアリング政策が結果的に夫婦のジェンダー構造にも影響を与えたことはしばしば指摘されるが、例えば孫がいる女性が孫の世話に自身の生活をすべて振り向けていなくても社会的に非難されず、祖母自身も罪悪感のような社会的圧力を感じなくて済むのはどのようにして可能になったのか。孫の世話に全力を注ぎ、その結果孫が成長したときに「孫離れうつ」が生じることもある日本の祖父母の「短期過剰消費」問題を解決していくためには、今後はこの点についても検討していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 安藤究・巽真理子 | 4. 巻 34(1) |
| 2. 論文標題 「パブリック/プライベート」空間の重なりと家族・ワークライフバランス：特集への招待 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 家族社会学研究 | 6. 最初と最後の頁 43-49 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4234/jjoffamilysociology.34.43 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 安藤 究 | 4. 巻 39 |
| 2. 論文標題 近年における「祖父母・孫関係」研究の動向 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 家族関係学 | 6. 最初と最後の頁 57～68 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24673/jjfr.39.0_57 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 安藤 究 |
| 2. 発表標題 シンポジウム趣旨：「パブリック/プライベート」空間の重なりと家族・ワークライフバランス 「職住分離の不明瞭化」の影響を考えるために |
| 3. 学会等名 日本家族社会学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 ANDO, Kiwamu |
| 2. 発表標題 Over-activated grandparenthood in Japan: the effects of Welfare State Regimes on the differentiation of grandparenting |
| 3. 学会等名 International Conference: The Family in Modern and Global Societies: Persistence and Change (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 ANDO, Kiwamu |
| 2. 発表標題 The Compressed Grandparenthood in Japan: The Influence of the Change of Social Policy, Low Fertility Rate, and the Lack of Social Pathway of Long Grandparenting |
| 3. 学会等名 XIX International Sociological Association World Congress of Sociology, Metro Toronto Convention Center, Canada (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 安藤 究 (分担執筆) | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 183 |
| 3. 書名 「祖父母・孫関係：理論から家族をとらえる」西野理子・米村千代編『よくわかる家族社会学』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 安藤 究 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 丸善出版株式会社 | 5. 総ページ数 220 |
| 3. 書名 「家族・親族・世帯」日本家政学会編『現代家族を読み解く12章』 | |

| | |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 安藤 究 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 名古屋大学出版会 | 5. 総ページ数 260 |
| 3. 書名 祖父母であること：戦後日本の人口・家族変動のなかで | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|